

中国電影大観



故郷の香りヌアン(暖)

2005(平成17)年3月12日鑑賞<テアトル梅田>

監督=霍建起フオ・ジェンチ / 原作=莫言モ・イエン / 脚本=秋実アキミ / 音楽=三宝サン・バオ / 録音=晃君アキミ・クニ / 出演=郭小冬クオ・シャオドン / 李佳リー・ジア / 香川照之カガワテリユキ / 関暁彤カンアキトウ / 葛志興カクシキウ (東京テアトル、ブロードメディア・スタジオ配給 / 2003年中国映画 / 109分)

第4章

日本と中国の浅からぬ縁

……「どうしても観たい映画」がある。タイトルと監督の名前とスチール写真を見ただけで「これは！」と思ってしまう映画。それがこれ！「ふるさと」「10年の後」「初恋の女性」——ありふれた題材だが、それをホントに感動的に描くことができるのは、中国の、それもごく一部の監督しかいないだろう。オーバーラップしながら静かに流れていく10年前のストーリーと現在の姿……。今更どうしようもないことはわかりながらも、いやそうだからこそ、やはり感動！映画ってホントにすごい芸術だと思わされてしまうこの名作は超お薦めだ！

2人とも北京電影学院卒！

この映画の主演は、井河ジンハー (郭小冬クオ・シャオドン) と暖ヌアン (李佳リー・ジア)。郭小冬は1974年生まれ、李佳は1977年生まれだが、2人とも北京電影学院の俳優科を卒業した演劇のエリート。この2人は霍建起監督の『藍色愛情』(00年)において脇役で出演した後、この映画に抜擢されたとのことだ。

静かなストーリーながら、その中で展開される井河と暖の心の動きは複雑で微妙なもの。そして、2人が故郷でともに暮らし、多くの時間と体験を共有していた時代と、それから10年後の今は、それぞれの家庭をもった全く立場、境遇が異なるもの。映画は、その全く異なる時代の2人の姿を静かに、しかしドラマティックに描いていくから、そこで要求される俳優の演技のレベルは相当高いはず。それをこの若き2人のエリート俳優は見事に演じている。

黒木瞳に似ていると思うのは俺だけ……？

映画の中で最初に暖^{ヌアン}が登場するのは、井河^{ジンハー}と曹老師^{グォ・ズーシン}（ツァオ先生）（葛志興）が橋の上で暖とすれ違う時。このシーンでの、ボロボロの服を着て重い荷物を背負い、足をひきずりながら歩いていく暖の姿を見て、井河がすぐに10年前の美しい暖^{ヌアン}を思い出せなかったのは当然。私がスクリーン上でこの暖の姿を観ても魅力的な女性とは全然思えなかったくらいだから……。

しかし、省の京劇の俳優を目指し、その劇団に入することを夢んでいる若き日の暖^{ヌアン}や、その後の井河からの手紙をじっと待っている暖^{ヌアン}はもちろん、今や啞巴^{ヤーバ}（香川照之）と結婚し6歳の娘までいる暖^{ヌアン}であっても、家に帰り姿かたちを整えてお客さんの井河^{ジンハー}を迎える暖の姿は、ものすごく魅力的！ 特別「美人顔」というのではないが、その表情やしぐさ、そして何よりもその目の輝きを観ていて思わず思い出したのが、40歳となった今でもなお美しく魅力的な女優黒木瞳。

この暖の顔を観て、黒木瞳に似ているとか、黒木瞳と同じような魅力があると言っても、一般の人には認めてもらえないかもしれないが、私にとってはそんなことはどうでもいい。しかし、暖^{ヌアン}を演ずる女優李^{リー}佳^{ジーア}が黒木瞳に似ていると思うのはホントに私だけ……？

莫言の原作は絶品ぞろい

この映画の原作は、莫^モ言^{イーエン}の『白い犬とブランコ』。張^{チヤン}藝^{イー}謀^{モウ}監督の『紅いコーリヤン』（87年）も、『至福のとき』（02年）もこの莫^モ言^{イーエン}の原作で、彼は現在最もノーベル文学賞に近い作家と言われているとのこと。もっとも、この映画は原作の設定を大胆に大きく変えているらしい。

それをここで細かく書くことは控えるが、この映画では暖^{ヌアン}の6歳の娘が大人たちの感情の動きを解説（？）したり、対話のきっかけづくり（？）をしたり、と大きな役割を果たしている。また、暖^{ヌアン}の足が不自由なこともストーリー構成に重要な役割を担っており、映画としてのストーリーの完成度はすごく高いものになっている。

したがってこの映画に限っては、映画を観た後原作を読むことはしない方がよいと私は判断したが……？

🎬「10年の後」の重さとは？

私が1967（昭和42）年に大学に入った時、バイブル的存在の小説が1964年に芥川賞を受賞した柴田翔の『されどわれらが日々——』。短い作品だが、この本をネタに徹夜で議論したものだ。その柴田翔が1965年6月に雑誌『文学界』に発表し、1966年に単行本として出版されたのが『十年の後』という小説。これは、大学を卒業した10年後に主人公が学生時代の友人たちと再会するというのがテーマだが、私はこの本を大学2回生の時に当時のさまざまな（？）恋愛体験や学生運動の姿を比較して考えながら読んだものだ。

この映画『故郷の香り』は、北京の大学を卒業した後、10年ぶりに故郷に帰ってきた主人公が、偶然初恋の女性と出会うところからストーリーが始まる。もちろん、柴田翔の『十年の後』とは時代も状況も全く異なるものだが、「その世代」の男女が感じる気持は万国共通で全く同じであるはず。そんな共通基盤があるため、この「十年の後」というテーマは永遠のもの……？

🎬見事な小道具の扱い方！

この映画には再三ブランコが登場する。それも日本人が一般的に描く公園にあるブランコというイメージとは全く異なり、村の中に1つだけある大きなブランコ。映画の中ではこのブランコが村の人たちが大勢集まって楽しむ道具となったり、ジンハー スアン井河と暖が愛を確認し合うための重要な小道具となったり、あるいは独りぼっちのヤーバ哑巴の心のよりどころとなったりする……。

映画製作上のテクニックと言ってしまえばそれきりのことだが、何とも見事な小道具の扱い方に心底から感心！

北京電影学院を卒業すれば、誰にでもできるというテクニックではないだろうと思うが……？

🎬香川照之のモノ言わぬ（？）熱演に拍手！

この映画の主役はジンハー スアン井河と暖の2人だが、映画全編を通じて大きな役割を果たすのがヤーバ哑巴。日本人の香川照之が中国人の役を演じることについては、私の事前の予想でも多少の違和感があった。『鬼が来た！』（00年）に続く中国映画への出演だが、この

『鬼が来た!』はあくまで日本人の役を中国映画で熱演したものの。しかし、この『故郷の香り』で中国人になりきり、微妙な感情の動きを見事に表現した彼の役者としての能力はホントにすごいもの。

もっとも、彼がこの純粋な中国人の役柄を演じることができたのは、セリフがないためかも……? それはなぜか? それは、彼が演ずる^{ヤーバ}哑巴は、耳が不自由なうえ口もきけない男という設定だから。

しかしセリフはなくとも、いやセリフがないからこそ、そんな役柄を演じるのはすごく難しいはず。この^{ヤーバ}哑巴が、北京に帰っていく^{ジンハー}井河に対して最後に示す言動(?)は、思わず涙がこぼれるもの。

こんなスゴい役を演じ切れる異色俳優は、日本では香川照之か竹中直人ぐらいのものだろう……?

^{フォ・ジェンチイ}霍建起監督と秋実、三宝そして晃君

この映画の監督は、『山の郵便配達』(99年)、『シヨンヤンの^{みせ}酒家』(02年)などの感動作を提供してくれた^{フォ・ジェンチイ}霍建起監督。彼は^{チャン・イーモウ}張藝謀監督や^{チェン・カイコー}陳凱歌監督と北京電影学院での同期生だ。

そして脚本は、^{フォ・ジェンチイ}霍建起監督の夫人であり、『山の郵便配達』や『シヨンヤンの^み酒家』の脚本も手がけた^{チウ・シー}秋実。また音楽は、「しあわせ3部作」と言われる^{チャン・イーモウ}張藝謀監督の『あの子を探して』(99年)、『初恋のきた道』(00年)、『至福のとき』(02年)をはじめとする多くの映画音楽を作曲した^{サン・バオ}三宝。さらに録音は、『北京好日』(92年)、『スケッチ・オブ・Peking』(95年)など「第5世代監督」の作品の数々を手がけている^{チャオ・ジョン}晃君。

こんなすごいスタッフを揃えて丁寧につくった映画だからこそ、静かだが、感動的な映画が生まれたことはまちがいない!

美しい風景は、「あの映画」と同じ

私は^{チャン・イーモウ}張藝謀監督の『初恋のきた道』が大好き。何度観ても飽きることなく、新鮮な気持ちで感動することができる。その要因の1つが美しい風景。

^{フォ・ジェンチイ}霍建起監督の代表作である『山の郵便配達』も、父と息子の郵便配達という「男の仕事」を通じた絆とともに、その「売り」となったのが、中国湖南省の少数民族が

住んでいる美しい山々の風景。郵便配達の仕事においては、その美しさよりも自然や山々の厳しさの方が問題かもしれないが、スクリーンを覗いている観客は、その美しい風景を覗いているだけで心があらわれるものだった。それと共通する自然の美しさをスクリーンいっぱいに見せてくれたのが、張藝謀監督の「あの映画」すなわち『初恋のきた道』。スクリーンを覗いているだけで、俺みたいなケンカ早い男でも心が安らくなったのは、きっとあの美しい風景のせい……？

実らなかった恋物語は、「あの映画」と正反対！

「あの映画」すなわち張藝謀監督の『初恋のきた道』も、都会に出て行った息子が田舎に戻ってくるシーンから始まるが、この『初恋のきた道』では、2人の初恋は見事に成就！ 父親が教えていた小さな村の学校で、その息子が父親と同じ授業を実施するシーンなどは、思わず涙を誘われるものだった。しかし、初恋は実るものばかりではないことは当然！ この『故郷の香り』では、すぐ近くに井河がいて、暖が最初に恋したのはこの田舎村にやってきた省の京劇のイケメン俳優だった。

この2人はかなりいい雰囲気(?)でいい仲(?)になったのに、やっぱり都会の男、ましてや芸能人(?)はダメ……？ そしてその後、ブランコをこぎながら結婚を約束した井河と暖には、ある不幸な事件が……？ さらに、大学に入学し、村のみんなから祝福されて北京に出かけて行った井河は、約束どおり暖を迎えに戻ったのか……？

実る初恋は『初恋のきた道』で感動映画となったが、実らない初恋も、この映画で同じような感動作に……。

2005(平成17)年3月12日記